

離島における国際理解教育

—長崎県対馬市立今里^{いまざと}・難知^{けち}中学校の事例—

岩 田 貢

▶キーワード

離島、国際理解教育、中学校、
対馬、大韓民国（韓国）

▼要 旨

長崎県対馬市は、九州と朝鮮半島とを画する海峡の中央部に位置する典型的な離島にある。同市では、日韓交流を主眼とした「国際交流教育」という名称の国際理解教育が進められている。今回その実践事例として取り上げた同市立今里中学校と同難知中学校における国際交流教育の内容は、国際理解教育の全国的な実践動向の中では、必ずしも主流の位置を占めている訳ではない。しかし、離島対馬における身近な地域の生活に立脚した国際理解教育は、当地で育つことへのアイデンティティの形成に大きな意義を有するものになっている。

1 はじめに

国際理解教育は、本来地域学習とは理念や内容等が異なる。一般に国際理解教育の推進においては、地域的特色を反映せず、広範な教育内容を扱う部分が多くある。しかし、行事を主にした国際理解教育の実践では、教育実践の背景となる地域の特性を無視することはできない。国際交流行事の舞台が実践地域そのものであり、行事の内容の多くが学校の全教育活動と関係し、当該地域の支援があつてこそ初めて営むことができるからである。

これまで、社会科の「身近な地域」において実践される地域学習の研究に関して、長崎県対馬市を取り上げてきたが、本論においても同地域を対象とする。対馬は、大韓民国（韓国）と海上で国境を接する離島であるという地域的特色を有している。対馬の地域学習に関して調査を進めていくと、同市が日韓交流を主眼として「国際交流教育」という名称で推進している国際理解教育に、必然的に注目することになる。ここでは、地域学習に関する研究の一環として、

当地域での特色ある国際理解教育について研究を進めることにしたい。

本論では、2004年度に上対馬、上県、峰、豊玉、美津島、厳原の旧6町が合併して対馬市になった以前から韓国との交流を進めている対馬市立今里中学校と、同難知中学校での国際交流教育の実践に注目する。そして、わが国の国際理解教育の歩みとその指導で求められている要点をふまえて、現地調査を通じて明らかになった両校の教育実践とその成果に関して、若干の考察を試みるものとする。

2 国際理解教育の系譜と指導の要点

(1) 国際理解教育の系譜

初めに、今里・難知両中学校の実践が、国際理解教育の中に占めている位置を確認するために、同教育の系譜をみておきたい。

わが国の国際理解教育に最も大きな影響を与えてきたのは、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の動きである。なかでも1974年の「国際理解、国際協力および国際平和のための教育ならびに人権および基本的自由についての教育に関する勧告」は、現在の同教育の基幹を占める考え方となっている。

国際理解教育に関する論考は多いが、まず佐藤郡衛⁽¹⁾による国際理解教育についてのまとめを取り上げる。佐藤は、ユネスコの国際理解教育に対応した日本の動きを、年度を目安にして整理している。

- 1970年代まで — ユネスコ協同学校計画（国際理解のための教育を加盟国で実験的に実施）に参加
人権の研究、他国・他民族の理解、国連の研究、総合的なテーマ
- 1970年代半ば以降 — 協同学校参加衰退→アメリカ理解⇄日本理解
国際化による現実的要請→海外子女教育、帰国子女教育
- 1980年前後 — 現実的要請に沿いユネスコ中心の国際理解教育から多様化へ
国内の国際化→多文化教育、異文化間教育
- 1980年代 — 三つが混在
ア）ユネスコの国際理解教育
イ）新しい国際理解教育（開発教育、環境教育）
ウ）国際化に対応した国際理解教育（海外子女教育、帰国子女教育）
- 1990年代 — 「グローバル⁽²⁾教育」として統合する動き
「グローバル」が国際理解教育の中心課題化

さらに、奥住忠久による次の整理を例に出し、ポストナショナリズム時代の国際理解教育のあり方を主張している。

国際理解教育：「主権国家の集合体としての国際社会を前提に、他国理解や異文化理解、国際関係理解等の学習を通じて、諸国民、諸国家間の平和、友好、協力、および人権の国際的保障をめざす教育」

グローバル教育：「グローバル化し、相互依存性を増しつつある世界を前に、グローバルな

見方やグローバルな価値の実現を重視して意思決定したときに、トラン
スナショナルな行動のできるグローバル公民性の育成をめざすこと」

これら佐藤郡衛のまとめとは別に、田淵五十生⁽³⁾による整理も取り上げてみたい。

田淵は、実践上の時代区分と影響分析を行い、次のような経過を示し、それらの実践において目標や力点のおき方に大きな影響を与えた要因として、下の4点をあげている。

└ 1960年代 「ユネスコ協同学校計画」に則した「他国理解」に力点がおかれたもの
└

現 代 多文化共生時代の実現を目指して行われる参加型学習

- ① ユネスコの動向と働きかけ
- ② 審議会の答申や政府の文教政策
- ③ 外国からの新しい教育理論の紹介
- ④ 外国籍住民の増加や人権意識の高揚

そして、各時期の実践を類型化して区分している。

第1期（1950年代後半～）

ユネスコ協同学校による「他国理解」に力点がおかれた時代

第2期（1970年代後半～）

海外子女・帰国子女を中心にした日本独自の国際理解教育が模索された時代

第3期（1980年代後半～）

欧米の新しい教育理論が紹介され、多様な実践が展開されるようになった時代

- ① 「グローバル教育」米国、英国
- ② 「開発教育」1980年代前半に紹介
- ③ 「ワールド・スタディーズ」英国

この時期に始められた参加型学習

海外ホームステイや修学旅行など、直接交流を組み込んだ実践

第4期（1990年代後半～）

「内なる国際化」の視点から多文化教育の発想に立つ実践が展開されるようになった時代

これ以降も、同時に以下のような実践の存在も指摘し、時代的に重層したまま並列的に展開されていることや、実践の多様化が進行していることを説明している。

- ・特定の国や国民を理解の対象に据えた「他国理解の教育」
- ・海外帰国生を中心にした「異文化理解の教育」
- ・地球的な課題を意識した「世界学習の教育」
- ・人権教育と結びついた「多文化共生の教育」
- ・コミュニケーション英語教育や地域の外国人や留学生との直接交流を組み込んだ実践

双方のまとめをみれば、国際理解教育を巡っては様々な用語や概念が含まれてきたことや、日本の国際理解教育が、ユネスコの動向と日本社会が置かれてきたその時々状況に大きな影響を受けてきたことがよく分かる。そして、現在は全般的にはグローバル教育の方向に向かっているが、同時に特徴や歴史を有する様々な実践が行われていることも指摘されている。

(2) 国際理解教育の指導の要点

国際理解教育に関する学習内容の構成要素や、同教育の教育実践の成果をみるに際して、要点として重視されている項目をあらかじめ把握しておきたい。

まず先の佐藤郡衛⁽⁴⁾は、国際理解教育の学習内容を構成するときのキーワードとして、次の4点を提唱している。

「文化理解」、「相互依存関係」、「環境、平和、開発などの地球規模の課題」、「共生」

また 米田伸次⁽⁵⁾、国際理解教育の再構築に向けたキーワードを4点示している。

- a) 人権尊重
- b) 自国の文化理解を踏まえた異文化理解
- c) 世界相互依存関係と人類共通の諸問題への理解
- d) 人類共通の課題解決に向けての国際的連帯と協力

そして、aを基盤、b・cを中心的展開領域、dを帰結として位置付けるとしている。

他方、中西晃⁽⁶⁾は、必要な国際的資質として次の3点をあげている。

- ①人権の尊重、②文化理解、③表現力

これらには共通している部分が多い。おおまかに言えば、今求められている国際理解教育の実践においては、「人権尊重」、「自国文化と異文化への理解」、「表現力」、「人類共通の諸問題、相互依存関係の理解」、「共生の意識」などが要点としてあげられているととらえられる。

3 離島「対馬」における国際交流の方向性

離島には、隔絶性や狭小性といった生活を営むのに不利な条件が元々存在する。そのうえ、本土の経済・社会動向の負の部分が増幅されて波及してくるという厳しい環境下にある。さらに近年は、財政支出の支援が期待できない中で、自立的な地域振興が求められるという苦しい状況に置かれている。

離島「対馬」の特徴の一つに、佐渡島、奄美大島に続く面積を有する比較的大きな島であるにもかかわらず、耕地率が極端に低いことがあげられる。したがって、古来から食糧の自給はできず、島外に頼ってきたという歴史を有している。二つ目の特徴は、日本の本土より朝鮮半島の方が距離的に近いという点である。

現在、「離島」対馬の振興策は、次のような考え方の下で進行されている。それは、「離島の地理的・自然的特性を生かした振興」、「地域の創意工夫による自立的発展の促進」という方向性と、地理的、資源的、自然的条件を有効かつ積極的に高度に活用した他地域との差異を持って発展する「価値ある差異」の創出、というものである。方策として、従来まで多くを依存してきた公共事業に頼らず、財政出動を少なくする代わりに特区指定獲得などの規制緩和によって島づくりを進めるという。

対馬の振興策の主軸は、韓国からの観光客誘致と韓国との国際交流の充実である。この交流は従来から官民ともに行われ、実績が積み重ねられている。このような長崎県や対馬市および民間の取組の要点を簡潔な文言で示すなら、「島の活性化としての韓国との交流」と「交流をになう人の育成」となる。

すでに筆者は、対馬の現状⁽⁷⁾や同地域における地域学習⁽⁸⁾に関して報告を行ってきている。これらの論考でも触れたが、学校教育の方向を示す対馬市教育委員会は、国際交流について明確な方針を出している。例えば、旧6町が合併した2004年段階において、市教委学校教育課が示した「本年度の主な事業等（1）重点事業」の一つには、次のようにあげられている。

2) 対馬ならではの国際交流教育（日韓交流教育）の推進

ア 国際交流（日韓交流）教育 促進事業の実施【新規】

○対馬ならではの国際交流教育として、これまで、市長部局が所管していた日韓交流関係事業で学校教育に関わるものを「日韓交流教育促進事業」として再構築し、教育委員会の事業として実施する。

そして、この事業推進に予算措置を講じ、現在に至っている。

4 対馬市立今里中学校での国際交流教育の実践

(1) 対馬市立今里中学校について

今里中学校は、上島と下島からなる対馬の下島地域に当たる難知町（当時）において、1947（昭和22）年4月に町立今里中学校として開校され、1959年の町村合併時に美津島町立今里中学校とされた。さらに2004年4月の旧6町の合併により対馬市立今里中学校となった。校区には、小さな漁業集落が海岸沿いに散在しており、人口規模は小さい。2009年度の生徒在籍数は、1年5名、2年6名、3年7名の18名で、教職員が13名の小規模校である。3学年の生徒数を見ると、1998年には18名を記録したが、それ以降は6名～15名で推移している。

(2) 韓国只沙^{チサ}中学校との国際交流活動

今里中学校と韓国只沙中学校との交流には、只沙中学校からの申し出によって開始されたという特徴がある。さらに、互いに小規模校であることも特徴的である。しかし、今里中学校の位置が小規模な漁村地域であるのに対して、他方の只沙中学校が半島内陸部の農村部にあり、校区の環境に相違がみられる。交流行事では、この点に留意して相互を理解す工夫が盛り込まれている。

ア 只沙中学校について

交流相手校の只沙中学校は、ソウルから南へ約4時間、釜山^{プサン}から西へ約4時間の位置にあり、人口約196万人の全羅北道内に位置する。全羅北道は、歴史的には古代の日本と友好関係を有した百済に含まれた地域である。

只沙中学校は農村地域にあり、1976年3月6日の開校で、「正直、誠実、協同」を校訓としている。当校は今里中学校に近い小規模校である。

イ 交流の契機

2000年、只沙中学校校長の姜榮一氏カンヨンイルから、これからの国際化時代に対応できる人材育成のために、韓国からもっとも近い外国である日本の中でも、特に親近感のある対馬島との交流を是非実現したいという意向が表明された。当時の美津島町国際交流員の李鐘洙氏リージョンスが只沙中の卒業生であったため、同町内の中学校に交流相手校を探すことになった。その際の只沙中の生徒が58人であったので、同程度規模の今里中学校との間に姉妹校の締結を行うことに至った。

ウ 交流の経過

- 2000（平成12）年7月26日～28日に、只沙中からの第1回訪問団が今里中を訪問し、「姉妹学校縁組協定書」に調印。生徒2年生22名、校長外職員4名、只沙面長（町長に相当）、PTA会長の合計30名が来校。
- 2001年は地域の「日韓交流「美津島の船」事業」として今里中から只沙中を訪問。生徒3年生15名、校長外職員5名、PTA等15名が参加。復路には只沙中からの訪問団が同行し今里中を訪問、「敬愛、誠実、友情」と刻んだ記念碑の除幕式を挙行。
- 2004年～2007年はおおむね相互に訪問。
- 2008年から双方の生徒数減により隔年相互訪問へ。今里中から計17名が訪問。
- 2009年は只沙中から訪問団が来校。今里中では、10周年記念として「美津島の船」で訪韓された関係者を招待。

この間、2002年の訪問中断、2003年のSARS（重症急性呼吸器症候群）の影響による訪問中止はあったが、2001年の教科書問題、2006年の竹島問題が発生した際でも、双方から訪問団が派遣された。

最近の訪問では、只沙中からは1・2年全員が参加し、先生4名が引率して7月下旬や8月下旬に来校、今里中からの訪問は2・3年生全員が参加し、8月下旬や6月や7月に訪問を実施している。

エ 只沙中学校来島時の受入日程

2009年度における、今里中学校の受入行事は以下のような日程で実施された。

受入期間：2009年7月13日（月）～15日（水）

日程 1日目……歓迎行事、ホームステイ

2日目……魚料理体験、鮪餌やり体験、海水浴、ホームステイ

3日目……送別会・観光

只沙中学校側の来島希望時期は秋であるが、今里中では2年生の職場体験行事があって受入が困難なことから7月に設定されている。

オ 交流時の生徒・地域のように

交流時のようすについて、今里中学校で聞き取り調査を行ったが、只沙中訪問時の日程は不明であった。また、その際の生徒の状況についても詳しい資料を得ることができなかった。ここでは主に只沙中受入時のようすについて、聞き取り結果を記すことにする。

- 韓国語は片言で初めだけ話し、後は身振りと言語で対応している。

- ・隔年訪問により、2年連続で日韓で交流できることから、今里中の生徒には好評である。
- ・ごくまれに事後に文通をするケースもある。
- ・来島時の活動に、内陸部に位置するという只沙中の地獄的環境を勘案して、海水浴を採り入れている。只沙中の生徒には、海水浴がきわめて好評である。
- ・韓国の中学校には校内に体育館や鉄棒ではなく、芝のグラウンドのみであり、日本の中学校内にみられる諸施設・設備に対する関心が高い。
- ・来島時のホームステイでは、1家庭で数名の受入を依頼するが、言葉の壁が最大の障壁となると思われ、当初は受入姿勢は消極的である。次回の訪韓時に子供たちが世話になるから参加するという姿勢がみられる。
- ・行事が始まると、校区の全地域の支援で実施する漁業体験や浜辺でのバーベキューなど、様々な人々の協力や、子供の笑顔や別離の際に涙を流す姿に接することにより保護者の不安は払拭され、積極的な姿勢に転じることが多い。
- ・今後は、生徒数減により、受け入れ家庭が確保しにくい状況になるおそれがある。
- ・教員もホームステイを行う。言葉が通じず身振りのみの交流になる。
- ・来島時には大量の土産が持参される。対馬離島時には、代わりに食品や日用品など、韓国の人に好評なものをプレゼントすることになる。

5 対馬市立難知中学校での国際交流教育の実践

(1) 対馬市立難知中学校について

難知中学校の位置は、先の今里中学校の校区に隣接する地域にある。同様に1947（昭和22）年4月に開校され、2004年4月の旧6町の合併により対馬市立難知中学校となった。同中学校の位置は旧美津島町の中心地区に当たり、比較的大規模な集落となっている。また、対馬市の行政の中心は、市役所が置かれている下島南部の厳原地区にあるが、下島北部の当中学校近辺には、対馬地域最大規模のスーパーマーケットやドラッグストアなど、いわゆるロードサイド店舗が立地しており、商業の中心地となっている。

このような地域環境の下、2009年度の生徒在籍数は1年53名、2年43名、3年52名の計148名、教職員数20名と、島内19中学校の中でも厳原中学校に次ぐ規模となっている。

(2) 韓国釜山市新仙中学校との国際交流活動

難知中学校と新仙中学校との交流には、その校区の状況や生徒数に大きな相違がある学校同士の活動である点に特徴がみられる。難知中が位置する対馬市は、2010年2月の推計人口が34,610人、旧美津島町に限って言えば、2004年合併直前の推計人口が約8,400人と、きわめて小規模な地域となっている。

一方、新仙中学校は、釜山広域市にあるが、当市は2004年の人口が3,711,268人という巨大都市である。新仙中が位置する影島区は、釜山広域市南部の半島にある区で、160,899人も人口を数える。新仙中も、生徒数が1,000人規模の学校である。校区をとりまく環境が大きく異なる

2校の交流に関して、難知中学校の資料を基にみていこう。

ア 交流のねらい

- ・相互ホームステイを通して、コミュニケーション能力を育成し、国際的な視野を広げ、グローバル社会で生きる人物の育成を目的としている。
- ・交流活動を通して、言語や文化、習慣が違う国の人と生活することで、文化の違いに触れ、韓国を身近な国として認識するとともに、これからも積極的に交流し、お互いをより深く理解したいという気持ちをもつことができることを期待している。

イ 交流の経過

- ・1993（平成5）年に、釜山市影島区にある新仙中学校と姉妹校関係を締結し、交流を開始した。
- ・1997年（平成9）年からは、韓国と日本を相互に訪問しながら、交流を16年間継続している。ただし、2004年度はSARS、2009年度は新型インフルエンザの発生のために、双方とも交流行事を中止した。

ウ 交流の日程と内容

難知中学校から新仙中学校の訪問は7月下旬に行われ、新仙中学校からの訪問は10月に行われている。ここで2009年度の相互交流行事の日程をみてみよう。なお、海路は韓国の海運会社が釜山港—比田勝・厳原両港間で運行中の定期高速船「ドリームフラワー」【シーフラワー2】を利用している。両船とも韓国からの観光客の利便性を考慮したダイヤが組まれており、釜山からの往路は南部の厳原港に着き、復路は北部の比田勝港から出発する。したがって、対馬側から往復する際は、韓国での滞在時間を短くせざるを得ないという日程上の不利が生じる。なお、同船は前掲の今里中学校の交流でも利用されている。

訪問時や受入時の時の主な活動としては、学校での交流会、相互ホームステイ、地域研修（見学）、教職員同士の交流などがある。

〈訪問時〉7月30日（水）～8月1日（金） ＊事前に詳しい予定は伝えられない。

1日目……比田勝港出発、新仙中学校での交流会、ホームステイ

2日目……釜山観光（合同）、昼食会、ホームステイ

3日目……釜山港出発、厳原港解散

〈受入時〉10月10日（金）～10月12日（日）

1日目……厳原港着、難知中学校歓迎行事、ホームステイ

2日目……浅茅湾クルージング、厳原町内見学（合同）、夕食会、ホームステイ

3日目……対馬各地見学（合同）、比田勝港出発

訪問から受入に至る1年間の流れは、2008年を例にとれば以下のようである。

月	内 容
4 月	交流参加家庭呼びかけ・決定
5 月	韓国新仙中学校受け入れ（2泊3日） → 10月に延期

- 6月 国際交流参加家庭保護者説明会
- 7月 新仙中学校訪問
- 8月 新仙中学校訪問保護者報告会
- 9月 韓国講座（4時間）、対馬市国際交流員 ^{ソンスジン} 成修眞さん
釜山民族芸術団交流公演
- 10月 韓国新仙中学校受け入れ（2泊3日）
学習発表会（韓国訪問・受け入れ報告会）
- 11月 参加保護者感想配布・提出
- 3月 新2、3年生国際交流参加呼びかけ

難知中の特色としては、生徒会の専門委員会の1つに「国際理解委員会」があり、韓国を中心とする外国文化の理解や掲示物等の作成による啓発活動が、日常的に行われている点があげられる。8月の訪問生徒保護者向け報告会や2学期の学習発表会では、韓国訪問時のようす、新仙中学校の生徒受入時のようす、生徒達が感じたことなどを作文にまとめて発表し、交流への理解を深める活動を行っている。

また2008年度からは、韓国訪問と新仙中生徒受入の事前学習として、卒業生や対馬市の国際交流員の方を講師に招き、韓国講座を4時間実施した。その他にも、釜山民族芸術団交流公演を催し、韓国の伝統的な楽器などを通して、韓国の文化に触れる機会を得た。それらの活動のようすは、廊下の壁に写真などを基に掲示されたり、芸術団から寄贈された楽器の一部は中学校の玄関に展示されている。

エ 交流時の生徒・地域のようす

難知中でも、交流時のようすに関して聞き取りを行ったので、その結果をまとめておく。

- ・新仙中では難知中訪問への希望者が多く、男女比を5：5にして抽選しているという。
- ・難知中では、参加希望者を募る際に保護者の理解を得るのが困難な状況がみられる。男子10人の希望者はそろろうが、女子10人が集まりにくい。
- ・生徒たちは事前学習で学んだ韓国語と英語で交流し、すぐにうち解けて仲良くなる。
- ・来島時の地域研修としては、厳原町にある万松院^{ばんしょういん}や長崎県立対馬歴史民族資料館を訪問し、韓国と対馬との交流の歴史を学習する機会を設けている。
- ・韓国の生徒は、海岸に押し寄せる韓国由来の漂着ゴミの量に驚く。韓国の海岸では体験できない、波打ち際での自由な遊びに喜びを感じるようである。
- ・訪問時も来島時も、韓国では大量の土産を用意する習慣があり、ダンボール箱を2個程度持参することがある。贈られるのは海苔やおかし類が多く、日本からのものは、醤油、ゴマ油、シャンプーなどが喜ばれる
- ・訪韓時の際の学校やホームステイ先の歓迎ぶりが大変熱心である。訪問時には、もてなしの心を学ぶことになる。
- ・訪問後は韓国での交流のようすを見た保護者が感激し、来島時の態勢に反映されていく。
- ・交流後も、家庭同士で交流を継続しているようである。

6 交流教育の特徴

4、5でみてきたように、今里中学校の国際交流は2000年に韓国只沙中学校からの呼びかけで開始され、難知中学校の場合は、1993年の釜山市影島区新仙中学校との姉妹校関係の締結から始められた。いずれも1990年代になってからの外国の学校との交流である。

先の2(1)にあるように、国際理解教育は、1990年代からグローバル教育や多文化教育など、国家や民族の違いを超えるような取り組みを主体としたものが主流となってきた。両校の交流は、先に佐藤郡衛があげた“同教育の動き”を基にしてみれば、1980年代から行われた「国際化に対応した国際理解教育」に位置づけられよう。

ただし、この場合の国際化の対応とは、1970年代にみられたような海外渡航をする日本人の増加に応じたものでも、1980年代からみられたようなニューカマーの増加による内なる国際化に応じたものでもない。日本が急激な国際化の動きに巻き込まれていく状況を反映したものである。いずれも、ある意味素朴な交流ともいえる“隣国理解の進展”を目指したものであると理解できる。

現在、日本各地の自治体や学校では、隣国の韓国との交流を数え切れない程活発に行っている。この中でも、とりわけ対馬の場合の交流には、特別な背景がみられる。地理的位置からみれば、九州よりも朝鮮半島に近く、古より日本と朝鮮半島との狭間で生きてきたという歴史が歴然としてある。いわば対馬は、古代から日本と朝鮮半島との橋渡しの役割なしでは生きてこれなかったのである。したがって、韓国は、現在も対馬が生活を営んでいく際に、欠かせない存在となっている。

いっぽうの韓国から見ても、日本は、古代から現在に至るまで、政治・経済・社会の各領域できわめて関係の深い隣国となっている。その中でも、半島から肉眼で見える最も近い島である対馬は、交流相手として相応しいというとらえ方をしているのではないかと考えられる。

それ故に、今里中学校では韓国只沙中学校からの申し出をスムーズに応えられたのだと考えられる。両校の姉妹学校の締結協定書には、「両校が学習、文化、スポーツの交流、ホームステイ実施により、両学校相互の理解と親善を深め、両学校の発展と繁栄に寄与する」⁽⁹⁾という趣旨が盛り込まれている。また同中の平成21年度「教育方針及び努力目標」の『学校経営の視点(7) 総合的な学習の時間』⁽¹⁰⁾には、次のような一項目がある。

○姉妹校の韓国「只沙中学校との親密な交流」をとおして、自国と他国の文化の違いを理解・尊重する国際理解教育を推進する。特に、交流10年目を迎えることで、これまでの交流の歴史を再確認する。

ここでも、特に異なる文化の違いを理解・尊重することが重視されていることが読み取れる。

次に、難知中学校の国際交流についてみていこう。同校では交流のねらい⁽¹¹⁾を、「新仙中学校との国際交流学習は、相互ホームステイを通して、コミュニケーション能力を育成し、国際的な視野を広げ、グローバル社会で生きる人物の育成を目的としている。その中で、言語や文化、習慣が違う国の人と生活することで、文化の違いに触れ、韓国を身近な国として認識するとともに、これからも積極的に交流し、お互いをより深く理解したいという気持ちをもつこ

とができるものとする。」としている。この中でも、異文化の理解や隣国理解を進めると共に交流意欲を高めるという内容が含まれており、今里中との共通点がみられる。

さらに難知中では、「グローバル」という文言をあげている点が特徴としてあげられる。この難知中の国際理解教育は、1990年以降の全国的な動向をふまえているとみることもできるが、交流相手の学校が、釜山広域市という国際的にも有名な大都市にあることが影響している可能性が想定できる。先にあげた難知中の国際理解教育のねらいが、最初から設定されていたものかどうかは分からない。むしろ、400万人近い人口があり、幾多の船舶を処理するアジア有数の大貿易港を擁する巨大都市との交流を進展させる中で、体験的に国家や民族という枠組みを考え直す機会が増えていったのではないかと推測する。それがいわゆる「地球市民」の育成という考え方に繋がっているとも考えられるのである。

元にもどるが、今里・難知両校の取り組みには、ホームステイによる生徒間の交流を中心に据えるという特徴がある。交流での驚きや喜びを体験させ、その大切さを理解させ今後の意識につなげていくことが、生徒同士のコミュニケーションから確実に生まれていくと考えられる。

これらは、先に田淵五十生があげた時代区分の中でいえば、第3期（1980年代後半～）に始められた参加型学習の一つ「海外ホームステイや修学旅行など、直接交流を組み込んだ実践」に該当するであろう。そして、第4期（1990年代後半～）以降も継続がみられる多様な実践の一つ「特定の国や国民を理解の対象に据えた『他国理解の教育』」に位置づけられよう。

7 実践からみえる交流の成果

(1) 今里中学校の生徒の感想から

2009年に実施した現地調査においては、今里中学校の生徒達が交流行事を行った際に記した作文を入手することができた。生徒達の感想から交流の成果の一端をみてみたい。

最近では、今里中の生徒は2008年に韓国を訪問し、2009年には只沙中の生徒を受け入れている。生徒が只沙中を訪問した際に書いた感想には、概ね次のような内容が含まれている。

- ① 只沙中学校における交流行事での感想
- ② 食事に関する感想
- ③ 生徒間の交流を通しての感想

①についての感想では、「只沙中の人のピアノがきれいでした。ダンスがそろっていてきれいでした。それから太鼓の叩き方がすごかったです。鐘の打つタイミングが難しかったです。」「太鼓みたいなものをしてリズムをとるのがとても難しかったです。でもあれが小学校レベルと聞いてとてもびっくりしました。」などのものがみられた。文化の中でも、音楽の種類やリズムの違い、それへの習熟の違いに驚かされている。また、子どもがする遊びの種類にも言及している。

②についての感想では、「料理では日本で食べないものが出てとてもつらかったです。特にキムチを食べて、とてもつらかったです。でも、焼き肉が一番美味しかったです。」「箸は鉄だったり、ご飯をスプーンで食べたりなど慣れないことがとてもありました。」などがある。第一日目の遅い時刻にとった夕食の印象が強かったようで、ほとんどの生徒が感想を記している。衣

食住という生活文化でも、直接味覚として感じる食事に関心が向くのは当然といえる。また、中学生が国内で経験できる韓国風食材や料理と、現地で経験する韓国料理の違いは、大人が想像する以上に大きいものがあつたようである。

③についての感想では、言葉に関するものが多い。例えば「ソーラン節など踊った後、只沙中の人と握手をして少し遊ぶとすぐ話せるようになりました。」「言葉は通じなくてもなんとかなるんだと思いました。」など、言葉の障壁とそれを越えた相互の気持ちのやりとりについて記している。

さらには、「言葉が通じないので困ったことがたくさんあつたけど、少しずつなんだか分かるようになりました。来年只沙中の人が来る時は、今よりも少し言葉が話せるように頑張って覚えたいと思います。」とか「私は韓国に行ってみて、言葉がうまく通じなかったことをすごく悔しいと思います。もし今度、韓国に行くことがあつたら、もっともっと韓国語を勉強して、次はお話もあいさつもできるようにしたいです。」というように、相手方の言語をさらに理解しようという意欲を表しているものもある。

コミュニケーションの進展では、「只沙中的人是泣いて別れるのを惜しんでいて、僕もまだ話などをしたかったです。」「只沙の人たちと別れてとても悲しかったです。」というような、交流相手との別離が大きな契機になったようである。前述したように、只沙中訪問時のホームステイは1泊のみである。生徒間の交流は延べ2日間に過ぎない。しかし、初対面でも人々との直接交流ではきわめて親密な関係が生まれることを体験しているようである。

翌年には訪韓した生徒達が、対馬の地元で只沙中の生徒を迎えることになる。訪韓の経験のない1年生ではとまどいが感じられる。「1日目はきんちょうしていたけれど、只沙中の人から話しかけてくれたので、きんちょうがとぎれて、サッカーをしたり、おしゃべりをしたりして楽しかったです。」「1日目には初めてでどう接したらいいのかわからなかったけれど、女の人達と初めに会話を始めて、一歩成長したなあと自分で思いました。困っているときも近くに行かずずっと質問をしたり、聞いてあげたりしてできました。」「とコミュニケーションへの不安から消極的であつたのが、短時間のうちにうちとけていくようすがうかがえる。

そして、1年も2年でも「1日目で一番うれしかったのは、ほとんどの只沙中の人に名前を覚えてもらったことです。」「遊んでいる中で、名前を聞いたり名前を教えたりしてとても嬉しかったです。」と、名前を覚えられたことへの喜びを多くの者が書いている。

何よりも自分の意志を通じさせることができるか不安を感じていた生徒も、韓国の只沙中の生徒達からの働きかけもあつて、次第にジェスチャーや英語を通じて交流することができるようになっていく。そして訪韓を経験していない1年生も、経験済みの2年生も交流を深める喜びを感じるようになって行くようすが分かるのである。この面から、「両学校相互の理解と親善を深める」という同校のねらいが、十分に生きているようである。

(2) 難知中学校の生徒の感想から

難知中学校では、2009年度の交流に参加した2年生男子1人の感想を得ることができた。

「僕は、難知中学校の先輩達により受け継がれてきた姉妹校との交流により、7月と10月の2回、韓国の新仙中学校の生徒とのホームステイなどの交流をしました。初めての

外国に行くということで緊張しましたが、僕がお世話になった家は温かく迎えてもらいました。また、釜山が大都市であることに驚きました。僕が、最も心配していた言葉も、英語と少しの韓国語で大体会話することができました。料理は辛いものばかりではなく、様々な料理がありました。特に、焼き肉はとてもおいしかったです。

10月には、新仙中学校の生徒を受け入れました。こちらでは、バーベキューや竹馬などの日本の遊びなどを一緒にしました。他にも、新仙中学校の人達とカラオケに行ったり、対馬の観光名所などに行ったりして交流しました。短い間でしたが、とても良い思い出になりました。今回の新仙中学校との交流では、初めて韓国へ行って、日本との文化の違いや韓国と日本の歴史などを学ぶことができました。また、外国の暮らしに興味がありました。このような活動に今後も積極的に参加して、対馬の外にも目を向けていきたいと思います。

これを読むと今里中の生徒が書いた感想と共通するものが多い。言葉への不安があったけれども、なんとか会話ができるようになったという点がその例である。1人の感想から断定的な判断はできないが、釜山や文化への言及をみれば、韓国の現状や文化をしっかりと観察しているようすもうかがえる。異文化への理解や他国の理解という意味では、「交流活動を通して、言語や文化、習慣が違う国の人と生活することで、文化の違いに触れ、韓国を身近な国として認識する」とした、雞知中学校の交流のねらいはよく達成しているようにみえるのである。

雞知中学校では、他に保護者の感想が得られた。その一部をあげておこう。

○受け入れ

- 礼儀正しく素直な生徒さんだったので、交流をスムーズにできた。人をもてなすことを息子なりに考える機会になった。
- 2人受け入れたので、2人でしゃべっていることもあったので、私たちがそれほど気をつかうことはありませんでした。

○食事について

- 食事では、気を使ってくれたのか、出した物は残さずに食べてくれました。
- お弁当づくりに少し戸惑いがありましたが、家庭料理、外食とは、また違った食事方法はより愛情を注ぐことができたと思います。

○言葉について

- 今年の体験で来年はもう少しうまく受け入れができるかなと思っています。今回は、辞書片手に会話をしていたのですが、来年はもう少し頑張って話を通じるように努力しておこうと思います。

○その他

- 韓国交流事業に参加させてもらい、本当に学ぶことが多く勉強になりました。次年度は、部活動などで参加できないかもしれませんが、また韓国に行ったり、受け入れもしたいと思いました。
- 受け入れは不安なこともありましたが、迎えてみると、とてもかわいくて、またぜひ来てもらえたらいいなと思いました。このような機会をいただいて、本当によかったと感謝しています。

先述したように、雞知中学校では、当初ホームステイの受入家庭を確保することが難しい状

況があったようである。しかし、結果的に保護者の気持ちを杞憂に終わらせたのは、子どもの態度や対馬を訪問してきた新仙中の生徒達の立ち振る舞いであったのではないだろうか。今里中の交流のような具体的な面は明らかになってはいないが、同等の有意義な交流場面が展開されたことは想像に難くない。生徒達に国際理解の感覚を持たせるのに大事なことは、個々人だけでなく、生徒を取り巻く家庭や地域という環境が大きな影響を及ぼすという点である。交流行事に参加した生徒達は、家庭の理解を得て、この経験をふくらませていけると考えられる。

(3) 両校の実践から

2(2)でみた国際理解教育の指導の要点を基に、両校の実践をふり返ってみよう。そこでは、同教育の実践においては、「人権尊重」、「自国文化と異文化への理解」、「表現力」、「人類共通の諸問題、相互依存関係の理解」、「共生の意識」などが要点とされているとまとめた。

これらのうち、生徒同士の直接的な触れ合いや、ホームステイ先での家族との交流から、「表現力」が発揮されたことは、上記の感想を通してよく理解できる。また音楽や踊りなど相互の文化にふれたことも「自国文化と異文化への理解」の点から意義深いことである。文化の違いに気付くだけでなく、将来の文化の担い手となる同学年の生徒が自国文化の修得に習熟していることを、お互いが理解できたことも評価すべきであろう。

「人権尊重」については幅広い考え方を基にして検討する必要があるが、ここでは互いに名前を覚えて嬉しかったという感想に注目したい。名前を覚えられることは、まず一人の人間として認識されるということの始まりといえるからである。

今回は、両校の国際理解教育の中でも交流行事を取り上げている。自明のことであるが、行事の中で充実した交流が行われたとしても、同教育のねらいすべてを網羅できる訳ではない。

ここで、田淵五十生による指摘⁽¹²⁾に注目しておきたい。次のようなものである。

- ・参加型学習は決してオールマイティではない。
- ・アクティビティを対象化して考察する「体験を経験化」する学習過程が欠落すると、単に楽しいだけの活動主義の授業に堕ちてしまう。
- ・直接交流を組み込んだプログラムは温かい共感的な理解を得させるには有益である。また、相手国民を理解しようとするモチベーションにもなる。
- ・「友好は易く、理解は難し」と表されるように、お客さんとしての滞在経験と真の意味での他国理解や他文化理解とは別次元の問題である。

“真の意味での他国理解や他文化理解”の文言をいかに解釈するかという点には様々な見解があるが、きわめて重要な指摘である。

このことについて、少なくとも上掲の難知中学校の「1年間の流れ」をみると、韓国講座や釜山民族芸術団交流公演など、国際理解教育を交流行事だけの一過性のものにしない工夫が見て取れる。今里中では校庭に交流の証として「敬愛、誠実、友情」と刻んだ記念碑が建てられている。いずれも国際理解教育を念頭においた学校教育が進められていることが垣間見られる。

それらの実践の支えの一つとなっているものに、両校の卒業生の中に国際交流に関わって活躍する人物が出ていることがあげられる。

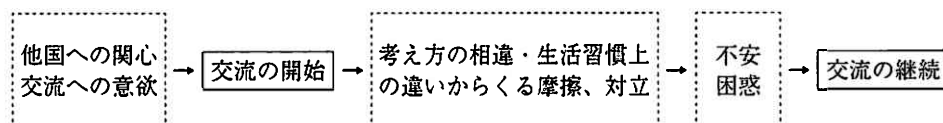
今里中の関係者には、県立対馬高校で2003年に設置された国際文化交流（韓国）コースに進

み、その後釜山の大学に留学した卒業生がいる。当人は、韓国との国際交流に関心が高く、今里中の受入行事には、地域の協力者として大きな力を発揮しているという。

また難知中の関係者の一人は、同じコースをたどって対馬市に就職し、現在観光物産推進本部において国際交流を担当している。そして韓国や国内に対馬の情報を積極的に発信したいとの意気込みを表しているという。

彼らが有している意識は、韓国を肉眼で遠望できる対馬ならではのものかも知れない。しかし、対馬市の国際交流への人材育成は着実に成果をあげているとみることができる。

いっぽう国際理解の意識や交流は、双方向から支障なく進むような単純なものではない。対馬の振興を目指す自治体や経済界の努力の結果、この数年間で島には韓国観光客が急増している。それに伴い、日韓両国民の生活習慣や考え方の違いから生じる様々なトラブルが報告されている⁽¹³⁾。言葉や習慣が異なる他国間の交流の過程では、様々な不安や困惑が次々と発生するのは当然のことで、次のような意識の繰り返しがみられるのではないだろうか。



対馬市では学校単位で継続的に日韓交流の行事を進めているのは、19ある中学校でも今里・難知両校など限られたところで、学校・生徒・地域にかかる負担は大きい。そして、これまでの両校の実践でも、事前に十分な情報交換と事前学習で相手方の理解を深めることに努めていたつもりでも、訪韓時の詳細な日程が直前になっても知らされなかったり、事情により訪問行事が中止に至った際にはそのとらえ方に行き違いが生じたりと、学校や地域に不安や困惑が生れた例は多く、交流継続への障害は大きいようにみえる。

反面、対馬市では従来から各種の日韓交流行事が継続的に行われており、交流を継続・発展させることの難しさを十分経験してきている。したがって学校の交流行事においても、回を重ねる毎に何かの摩擦が発生することは予測の範疇に入ってきており、なおそれを乗り越えて違いを認め合い、さらなる交流を推進しようという気運も高まっているようである。その原動力になっているのは、何よりも交流行事において、子ども達同士が親密度溢れる言葉や行動を交わす中で見せる連帯意識であろう。いわば先の「共生の意識」の芽生えに相当するものかも知れない。交流を継続する中で、次の交流を支える意識や姿勢が生まれ育っているのである。国際交流教育の実践は、多大な労力を要し克服困難な事態が生じるものであっても、韓国との交流で生きようとする対馬にとれば、無くてはならない学校教育の柱となっているようである。

8 おわりに

最後に、今里・難知両中学校が国際理解教育を円滑に進められる背景に触れておきたい。それは、対馬市による予算化を含む手厚いバックアップである。

2009年度の対馬市教育委員会学校教育課が策定した「国際交流（日韓交流）教育促進事業」のねらいとは以下のようなものである。

- (1) 日韓交流活性化のための対馬の人材育成
- (2) 時代変化に対応できる、国際感覚に溢れ、広い視野や豊かな人間性を備えた人材の育成
- (3) 対馬ならではの国際理解教育の推進
- (4) 日韓交流に係る人材育成のための費用対効果の向上
- (5) 日韓交流事業の継承と発展

そして、〈人材育成と学校教育〉という項目では、

その基盤は、人と人との積極的交流にある。特に、次代を担う人材育成には、学校教育における国際交流活動の充実を図り、学校間交流の充実・進展を地域間交流まで拡大し、対馬市としての日韓交流の活性化につなげることが重要である。

そのためには、学校現場と行政が一体となって、対馬市として「対馬の子どもたちにつけたい力」を明確にしたうえで、全市的視点で「対馬の子どもたちを中心に据えた」日韓交流の教育施策を講じなくてはならない。

と述べている。

地域学習の実践においては、身近な地域に対する理解と関心を深めるとともに、身近な地域の発展に努力しようとする態度も育てるという点で、極めて大きな意義を有している⁽¹⁴⁾。

現在の日本の経済・社会情勢が反映して、対馬の今置かれている状況には非常に厳しいものがある。学校卒業後に対馬で職を得られる例は限られており、学校に通う子ども達も、自然と九州など本土での生活に関心が向いてしまう。したがって子ども達には、対馬で生きることや、対馬に生まれたことへの自負を持たせることが大きな課題となる。対馬で地域学習を行う場合に留意すべき点はそこにある。地域学習においては、身近な地域における事象の教材化が必要であるが、それに関する取り組みは着実に進められている。

今回報告した今里・難知両中学校の体験的学習を軸とした国際交流教育は、全国的な国際理解教育の流れの中で見れば、過去の実践の形態を残したものであるかも知れない。また、理念や内容面で近年のグローバル教育のあり方とは必ずしも重ならない部分があるかも知れない。

ところが、韓国の中学生との交流行事においては、身近な地域での生活を基にした体験や日常的にみられる文化の紹介が盛り込まれている。したがって対馬や美津島地域について十分理解し、それを伝える努力が求められる。加えて身近な地域への誇りを持つことにより、交流の際の意識が高まることになる。両中学校の交流行事には、これらが自然に身に付くよう工夫がなされている。表面上は国際交流の形をとっているが、対馬で育つことへのアイデンティティの育成に計り知れない効果をもたらしている。韓国との交流に生きること活路を求めている対馬で実践される点から、さらに充実した取り組みが求められている重要な教育活動であるといえよう。

※本論に記した対馬市立今里・難知両中学校での聞き取りは、2009年度短期国内研究員研究期間を利用した現地調査の際に実施したものであることを付記する。

〔注〕

- (1) 佐藤郡衛「国際理解教育 多文化共生社会の学校づくり」明石書店(2001)、p.17～69
- (2) 各用語は、以下のような意味を含んで使用されていると考えられる。
 - グローバル(global): 地球社会の、一体化した世界の
 - ナショナリズム(nationalism): 国民の利益・団結を高めようとする思想・運動
 - トランスナショナル(transnational): 国境が消滅した状況の
- (3) 田淵五十生「国際理解教育・グローバル教育の研究」、全国社会科教育学会『社会科教育学研究ハンドブック』明治図書(2001)所収、p.404～413
- (4) 前掲(1)
- (5) 米田伸次「国際理解教育の理念と展望」、中西晃編『国際教育論』創友社(1993)所収、p.333～358
- (6) 中西晃「日本人の国際的資質と調査結果」、中西晃研究代表『日本の児童・生徒の国際的資質・能力育成に関する基礎的研究』平成元年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(1990)所収、p.29～45
- (7) 岩田貢「変容する地域を捉える—日本地誌と世界地誌—第3回“観光と交流に生きる【対馬】”」古今書院『地理』Vol.54、2009年5月、p.90～95
- (8) 岩田貢「離島地域の中学校における地域学習の現状—長崎県対馬市を事例として—」龍谷紀要 第31巻 第1号、2009年9月、p.167～180
- (9) 2009年7月13日今里中学校「平成21年度只沙中学校歓迎式」における園分章校長の挨拶文より
- (10) 平成21年度 対馬市立今里中学校「学校要覧」より
- (11) 雑知中学校「国際交流事業(韓国釜山市新仙中学校相互ホームステイ)」説明文書より
- (12) 前掲(3)
- (13) マスコミ上でも報告は多いが、次の論考や前掲(7)に詳細な状況をみることができる。
 - 助重雄久「長崎県・対馬におけるインバウンド観光の展開と課題」、平岡昭利編『離島研究Ⅲ』海青社(2007)所収、p.89～106
 - 助重雄久「インバウンド観光に揺れる『国境の島』—対馬(長崎県)—」、平岡昭利編『離島に吹くあたらしい風』海青社(2009)所収、p.7～22
- (14) 前掲(8)